第二章　西伯利鐵道調査時代（上）

一、西伯利鐵道の學術的調査

世界鐵道工學界の一大疑問

我が帝國の運命を扼しつべき、恐るべき此の西伯利大鐵道線に就いては博士の專門的調査報告に俟つにあらずんば、當時何人も、其の軍事的經濟的能力を明白に計量するを得なかつた。否歐米の學界にても此の鐵道の實際上の價値に就いては多大の疑問を以つて迎へて居たのである。或る者は其の能率の不充分なるを豫斷し、或る者は大いに其の完美を過信し、毀譽相半し、褒貶互に相讓らざる觀を呈し、これを學術的に決定する博士の任務や、從つて重大ならざるを得ないのである。

重大なる博士の任務

これに對し博士の觀察中で世に發表して差支なき部分は博士著西伯利鐵道に詳細に記述してある。

二、博士調査旅行の艱苦

明治三十三年五月

博士を乘せた日本郵船會社の汽船大連丸は、長崎より釜山へ、元山へ、淼渺たる海波

十七日浦鹽に着

烏蘇里出發

黑龍江を溯る

ストレテンスク發

ペトルブルグ行に乘車

を蹶つて約五日、七十一時間を費し、五月十七日浦鹽斯德に到着した。博士は翌十八日に烏蘇里線の鐵道事務所を訪ひ、又は露清銀行に赴きて、巡回手形を依頼する等の準備をなし、携帶品を減じて成るべく身輕に結束し、十九日を以つて烏蘇里停車場より乘車出發した。これより博士は亂雜無秩序なる殖民鐵道の客となりて二十日午後一時半ハバロブスクに到着し、次いで二十二日、川蒸汽船に身を託して、黑龍江を溯ること二十五日間、船中貯水の僅少なるため含嗽洗面の水もなく身を横たふ場席の堅き板間なるため、晝夜引續き夢見る如き睡眠不足に陷り、又は冷熱常なき氣候の變化に襲はれ、或は食物の用意盡きて殆んど飲食し能はざる窮厄に會しつゝ、六月十六日ストレテンスクに着したのであつた。

博士は次いで六月十八日ストレテンスクより、粗造の建築列車に便乘し、十九日は知多驛を通過し、二十一日貝加爾（バイカル）湖畔のミソワヤに到着。この日、西伯利鐵道の偉觀たるバイカル湖上の列車輸送船に運ばれて五時間を費して對岸バイカル驛に至り、夜半イルクーツクに着き翌二十二日ペトルブルグ行の切符を買求めて旅客列車に乘車し、愈渺茫たる西伯利の原野を西して、二十四日、有名なるエニセイ河の架橋を通過し、クラスノヤルスク市を經。車窓より一晝夜に亘る山火事の火煙を

列車進行中事故頻出す

望し、行々或は列車の長距離運轉中、車軸の發火燒失により、或は又大風雨のため列車顚覆の椿事を見むとする等、種々の事故に遭ひつゝ六月二十七日未明にヲムスクを過ぎ翌二十八日チエリヤビンスクに到着するを得た。

西伯利鐵道の各支線敷設基點

此のチエリヤビンスク驛こそは所謂西伯利鐵道の西方極端である、こゝより敷設せられた支線はウラル鑛業鐵道の東端であつて後年悲慘の出來事のあつたエカテレンブルグ及びチエーメンに達して居る。イルクーツク、ヲビ間を中央西伯利線と稱し其の延長千七百十七露里餘。ヲビ、チエリヤビンスク間を西部西伯利線と稱し其の長さ千三百三十二露里餘。而して博士は此合計三千五十露里卽ち凡そ二千哩の間を六月二十二日午後二時に發し二十八日の午前四時に着いたのであるから、經度に關する時間の差並びに列車の停車時間を加減して計算するときは、一時間凡そ十八哩の平均速度を出して居たことが明白となつたわけである。

行程二千哩西伯利鐵道西端驛に着

三、博士當年の旅行日記

堅忍不拔の意氣と不屈不撓の精神

幼より困苦を物の數ともせざる堅忍不拔の意氣と、長じて幾多の難事業に當り一歩も退かざる不屈不撓の精神とは、博士をして如何なる境遇に處するも平然たる

博士一流の見聞調査感想

餘裕あらしめた。博士は斯くして肉體上の痛苦を凌ぎ得て、沿線矚目の事物を盡く專門的調査資料として蒐集すると同時に、各地の狀況を各方面より委さに觀察し、或は重要都市の發展を考へ、地方の民情風俗をも研究する傍、情想饒かなる博士は歐露東侵の現狀に鑑み、往昔成吉思汗（ジンギスカン）時代に於ける亞細亞民族の偉業悵として夢の如きを嘆じ、又は露國政府に罪を得て、遠く國外に流謫せらるゝ所謂追放人列車に會しては、彼等の命の非なるに同情の熱涙を濺がざるを得なかつた。這間の見聞、視察、感想を錄せる唯一の記念として、永久に傳へらるべきものは、博士執筆の旅行日誌に外ならない。編者は左に其の數節を抄出して、西伯利に於ける當時の事情と、博士が當年の面目を偲び、併せて博士の行くとして可ならざるなき才識の一端を窺ふであらう。

後世に傳へらるべき紀念の日記

「浦鹽斯德ハバロフスク間烏蘇里鐵道」より

(1)明治三十三年五月十七日(露曆四日)快晴無風、旭日は日本海より昇りて遙に鷄林八道の山を照らし、日本郵船會社の汽船大連丸は日章旗を飜して北に向ひ寒地に波を蹴つて進む。前面に一小島の横はるあり、島の左に航路を取り益々陸地に近づきて進めば、終に一大灣に入る。之を金角港（ゾロトイロッグ）と云ひ水深く波靜にして周圍の山脈甚だ高からずと雖も、滿目軍備にあらざ

るなし。灣の東部は軍港にして西部へのみ商船の出入を許せり。

午前九時、着港の合圖に應し小蒸汽船の來るあり。警官及檢疫醫上船して一應の調をなす。是れ當時本邦にペスト流行せし故にして、露國警察官は威容嚴然、檢疫醫員は容貌穩和なり。我が船長、事務長に就き乘客の事項を尋ね又船員及各等船客を整列せしめて其前を通過し、爰に全く檢疫を終れり。船を廻りて、支那人朝鮮人の漕ぎ來るハシケ船の群集するあり。乃ち其一を傭ひ簾藤氏と同乘して行くこと四五丁にして浦鹽斯德に上陸するを得たり。(略)

東部の軍港には電燈、機械場、船渠、浮船渠、あり、又山嶺には砲臺を列置し兵屋之に接す。西部の商港には義勇艦隊及東清鐵道會社の船、及其他のもの數艘入港し居れり。

浦鹽斯德は人口は貳萬八千餘にして主なる街道には、石造煉瓦造貳階三階建の家屋ありと雖も、市の場末に至つては木造平屋多し。商權は多く獨人の掌握するところとなり。クンスト、アルペット商會最も大にしてチューリン、其他の商店之に亞ぐ。商店は分業に非ずして各商館各々銀行、運送業、受負、卸、小賣等總ての事に從事し、商業は盛大に非ずと雖も日を追うて盛ならんとす。街路は甚だ惡く晴天には塵土を捲き雨天には泥濘脚を沒し、容易に通行し難く、道路左右に凡そ一間幅の木板を敷き以て通行者の便に供す。若し此設備なき時は殆んど通行に堪へざること恰も米國新開地の市街と一般なり。市内には電燈瓦斯燈の設なく、朝は早朝より車馬轢轆として其響絶間なく而して通行者は軍人多數を占め居れり。馬相は一般に

美にして荷車を輓くものゝ雖も亦然り。夜は八時若くは九時後に至らば街路を通行するもの極めて少なし。是れ夜中物騒なりゝ聞きて外出を見合すが故なりゝ云ふ。夏時は支那人朝鮮人一萬五千も入込み日本よりも二三千人の勞働者の來るあり、市街土地の價の如きも十五六年前に比すれば三倍以上に上れりゝ聞く。

日本人にて此地に旅館を設けたるものあり。扶桑社ゝ呼び、一日壹圓乃至貳圓の宿泊料なり、充分の便利を得べし。露國風の旅館に投ずれば部屋及食事を合せて一日四圓乃至六圓を要し、歐米普通の旅館ゝ異なるこゝなし。余の滯留せしゝころをゾロトイロッグ(金角)ゝ云ふ馬車は一時間八拾錢、當地の御者は他の西伯利の地方に居るものより良好なれゞ、動もすれば賃金の增加を求めんゝす。此日貿易事務館を訪ひ野村基信氏ゝ共に地方軍務知事を縣廳に訪ひ諸の手順をなした。(略)

(2)五月十九日(露曆六日)晴。午前六時華氏六十六度、午前七時、烏蘇里線停車場に行く。汽車の出發するのは午前九時二十五分なれゞも、切符を買ふに手數を要せんこゝを慮りたるなり。然るに或は露國の官吏に先取せられ、或は數日前既に切符買取の申込をなし置けるものもありて其混雜名狀すべからず。遂に發車時刻を過ぐれゞも切符を買ふ能はず。午前十時頃に至り一聲の汽笛ゝ共に列車將に出發せんゝす。是に於て兎も角車中に乘り込み發車の後、車長に依頼して乘車し居るこゝを承諾せしめたり。次の停車場に着きたる時下車して切符を購

ひハバロブスク迄の切符を得たり。御用の往復及郵便輸送は無賃にて在官者は下級の切符にて上級の席に居るを得る等のことありて普通旅行者は恰も御用船に便乘を願ふものと一般なり。(略)

浦鹽を發してより左折してアムール灣に出で暫く其東岸を走りて平野に入り、行くこと六十八哩(百二露里)。午後三時ニコリスクに着す、ニコリスクは滿洲に通ずる鐵道線の分岐點なり。(略)

此地方工事には支那人朝鮮人露人を用ひ又時には兵卒を出して工事に從事せしめた、其竣工期限切迫せる時に當つては晝夜を問はず數里間に篝火を燒き又火を燒きて凍土を溶かし築堤を爲す等は最も壯觀なることありしと聞く。(略)

歐米諸國の列車内に在りて乘客各其席を讓るものとは全く其趣を異にし、列車内にて互に好き席を占め得んと競ふの有樣は殆んど名狀すべからず。余は辛うじて一等室内に席を得たり。余の同室者は義勇艦隊のカピテン任滿ちて歸國するウートムスコイ日本より同船せし獨人ピュッツ氏、ハバロブスクに出張する浦鹽事務館の莊司氏なりき。而して其隣室に最も好き室ありしが支那官吏にて金鑛の監督官たる者、其妻妾を携へて不遠慮に之を占領するあり。然るに一露人來つて頻りに其席を得んと爭ひしが、支那人の通辯官其間に入りて議論することと半時間、支那人遂に其席を占むるを得て露人は終に一等室内に席を得ること能

はず。轉じて二等室に入れり。此列車は一二等共に寢臺付にて其間に大差なし。一等車は四人を一室とし十四人を一車の定員とす。二等車は車を二區畫に別つのみ。室内に蒸氣暖房あり。且つ手動制動器を備ふ。三等車は日本の三等車と相似たり。四等車は荷車に腰掛を取付けたるものなり燈火は蠟燭を用ふ。

夜半起きて窓間より乾坤を望めば、列車は正に水星を左に、北斗七星を頭に戴き、大洋の如く渺茫たる平原を、北極星に向つて走り居れり。(略)

客車凡そ十三輛と荷車十餘輛とを合せた混合列車及荷物列車は、毎日一回つゝ浦鹽斯德を發して凡三十一時間を費してハバロフスクに達す。(略)

「ハバロフスク、ブラゴベスチヱンスク間黑龍江航路の一」より

(3)五月二十一日(露曆八日)晴。午前七時半華氏七十二度終日大差なし。ハバロフスクに滯在して乘船の手順を爲すに少なからずの努力を要せり。日本人の商店數軒あり。皆相應の利益を得て居ると云ふ。其缺くるところは資本の豐ならざると同胞の共同一致の少きにあり。(略)

(4)五月二十二日(露曆九日)晴。午前六時半、華氏五十二度、此日漸く乘船の三等切符を買得し午後一時ジョンコツクリル號に乘込めり。此船は川蒸汽船中の最大なるものにして、一等船客二十餘名、二等十餘名、三等客三百餘名を容るゝに足る。

一二等切符は大概公用出張者又は緣故あるものに占領せられ、普通旅客は三等切符すら容

易に得難く乘船すること能はずして數週日空しく滯在するもの少なからずと聞く。(略)ハバロブスク、ブラゴベスチエンスク間(凡そ五百哩にして航行壹週間を費す)の三等乘船賃は僅に三圓餘なりと雖も、食料其他は總て自辨せざるべからず。支那人朝鮮人の勞働者も此級の乘船者にして其混雜不潔なること船内に席を爭ふの有樣とは筆紙に盡し難し。余輩一行は便所、機關又は薪積込口の近傍を避けたれども、郵便物置場の蓋の上に席を占めたるため停船毎に郵便の出入あれば晝夜を問はず起上らざる可らざるの不便あり。されど近傍に下層の露人及コサック兵居りて終日起居を共にしたれば其風俗等を見るの便を得たり。夜に入れば食堂、甲板、洗所、通路、を問はず、苟くも間隙あれば之に臥すものありて殆んど通行に供する寸隙もなし。(略)

(5)五月二十六日(露曆十三日)晴。午前五時華氏六十一度。河の兩岸は依然として引續きたる無限の平原にして、北岸卽ち露領には所々に小さき村あり。南岸の滿洲には見渡す限り一の人家もなし。正午華氏七十五度岸には高さ三間乃至五間の樹木繁茂す。午後二時インケンフスカヤに着す。日暮風微にして波穩かに、江水恰も鏡の如く、唯汽船波を蹴るの音を聞くのみ。平原限りなくして川の上下流を知り難く、午後八時、西方日の沒する處を望めば、恰も河水の大海に注入せんとするかと疑はるゝばかりの景色なり。午後九時、華氏六十三度、此日一艘の下り汽船にも出會はざりき。(略)

(6)五月二十九日(露曆十六日)晴。午前六時華氏五十九度、大霧ありて數十歩の外を辨ぜず。依つて舟の速度を減じて徐行す。暫くあつて霧霽る。午前九時ブラゴベスチエンスクに着す。江岸より馬車を傭うてグランドホテルに泊す。浦鹽斯德を發してより一旬日、此日初めて洗身するを得たり。(略)

伯羅照夫琛斯克(ブラゴベスチエンスク)

(7)黑龍江の北岸には伯羅照夫琛斯克(ブラゴベスチエンスク)の如き宏壯なる市街あれども、南岸には僅に支那人部落の愛琿(アイグン)あるのみ。露清兩國經營の差實に歷々たり。往時清朝の初めに當つてはネルチンスク條約を以て露人を追拂ひたることもあり。又其以前の成吉思汗時代には捲土の勢を以て歐洲迄侵入したることもありしに、今や興廢衰頓に地を換へて、宛も一抹の夢幻の如く、余はひたすら感慨に勝へざりき。

黑龍江上偶感

伯羅照巷聳高樓　茅屋荒涼是滿洲
盛衰分明無限感　火船蹴浪遡中流

然るに余の此地を通行してより、後一ヶ月を經ざる中に滿洲八旗兵が義和團と通じて露船の此江を下るものを襲擊し、進んで伯羅を圍んだ。時恰も江水減少して交通不便十九日の後、始めて露兵此に着して其圍頓に解けた。然るに新來の露兵は居住三千の支那人に對し掠奪

其他罪惡の限りを盡くして之を鏖殺せり。(略)

ハバロブスク、ブラゴベスチエンスク間の航路は七百九十六露里にして黑龍江航路の中部に屬し、上部はブラコベスチエンスク、ストレテンスク間千二百七十九露里、下部はハバロブスクより韃靼海峽のニコライウスクに至る、長さ千五十八露里である。下部中部にあつては三百噸餘のバルジヤ三四艘を曳きて汽船の上るを常とし、上部は一二艘を曳くのみ。(略)

此航路は乘客多く設備少なきが故に不便少なからず。每朝嗽口洗面する能はず、最初は不愉快を覺えしが慣るゝに從ひ之を感ぜざるに至れり。船中乘客の有樣は不潔の一言以て之を蔽ふに足る。其旅行に慣れたるものは小なる金盥を携ふるものあり。是れ最も便利を感ずるならん。又各人必ず水入とコップを携ふ。皆金屬製にして一切の事皆之によつて辨ず。面を洗ふときは之に水を汲みて口に啣み少しづゝ吐き出し、兩掌に之を承けて面を洗ひ了り、後に手拭又は衣服の一端にて顏を拭ふを常とす。又小兒の面を洗ふときは、含みたる水を顏に吹き掛けて後之を拭ふを常とす。余輩はハバロブスクを出てゝより以來壹週間夜服を脫せず板の間に寢ねざるを得ざるの不幸に逢ひ、同行の獨逸人も亦眠に就く能はずして殆んど晝夜引續きたる夢の如しと云ひ居れり。されど余は甚だしく不快にも思はざりき。旅行者の多くは其旅行に必要なる器具を携帶するを常とす。

露國にあつては、外國人の旅行者に不安の念を生ぜしむるものなきに非ず。其政體の壓政な

る通信に過酷の檢束を加へ、往々信書の不着、破損延著等あり。又或は一切の暗號電信を禁ずるあり。旅行券の檢閲に手數を要し官吏の勢强くして如何なることを爲しても責任ある答辯をなさゞる如き其一斑なれども個人としての交際は外人に對しても親切なり。

「ブラゴベスチエンスク、ストレテンスク間黑龍江航路の二」より

(8)六月八日(露曆五月二十六日)晴。午前六時有名なるアルバジン城を過ぐ、時に遡江凡そ七百露里。此日水淺くして船底屢々川底に觸れしが、午後八時に至り淺瀨に坐して動くこと能はず。時に遡江八百露里餘にてストレテンスク迄四百八十露里、卽ち凡そ三百哩を餘せり。

(9)六月九日(露曆五月二十七日)晴天無風。此時汽船の中部は江の中央水深二尺の所に坐して毫も動かず、早朝船員を岸に上げ、江岸の樹木を切つて大なる卷轆轤(シヤチ)を造り、舟の一端に鐵繩を取着け、乘客皆出でゝ轆轤を卷き之を曳卸さんとして終日苦心したれども舟終に動かず。依つて最近驛舍の電報を取扱ふ處に人を遣はし迎ひの船に來るべき電信を發す。而して其發信所迄行くに一日を費せしと云ふ。午後烏蘇里移民四百人づゝ乘込みたるバルジヤ三艘を曳きて汽船の下るあり。我が船の側を巧に通過して去る。此日華氏七十二度乃至八十一度の間を上下せり。

(10)六月十日(露曆五月二十八日)晴。前日と方法を變更し、曳舟を汽船の一方に着け、又上流に碇を入れ、之に滑車を着けて鐵繩を透し、其一端を汽船に結び、一端を轆轤に着け、船員乘客總掛

りにて轆轤を捲き河の流勢を利用して船を回轉せしめんとして之を試みること數回なりき。江岸に瑪瑙石あり。砂石、花崗石、硅石の砂利中に混ず。依て之を拾ひ取り携へ歸つて其一面を磨き之を印材に製す。余の號石齋の二字を刻む。

午後雨ふりて江水少しく增し來り、濁りて二尺の水底を見る能はず。日暮に至り漸く舟を動かすを得たり。依つて近傍の江岸水深き處を選びて、爰に舟を泊し、迎ひの舟の來るを待つ。此日、溫度日中は華氏六十度乃至七十八度を上下し、夜中は四十度に降れり。

(11)六月十一日(露曆五月二十九日)晴。朝六十四度午後七十三度に上る。河水の溫度を計りしに五十二度なり。若し無事に此船航江せしならば、此日は既にストレテンスクにあるべき日取なり。此時船中用意する所の食物將に盡きんとして空しく船の來るを待つ。

午後九時半、遙に汽船煤煙の揚がるを見る。是れ卽ちアムール號なり。其形少にして幅二十尺餘、長さ百二十尺、水深一尺五寸、機關は英國の製造所にて作りたるものなり。而して幅十尺餘長さ五十尺の家根船一艘を曳き來る。依つて余は直に露國大佐及獨逸人ピユッツ氏等と共に汽船に乘り移りしが、此船には殆んど等級の區別もなく汽船の底は鐵板にして之にケットを敷き外套を以て身を覆ひカバンを枕として眠りぬ。然るに夜中江水寒くして身體を冷すのみならず。時に川底に觸るゝときは身を擊つが如くに感じ、殊に食物の用意盡きて飲食する能はざること一晝夜に近からんとす。獨逸先生さきにハバロブスク、ブラゴベスチエン

スク間の江航にて幾多の不平を漏らしゝが此に至り最早耐へ難かりしと見え幾度か一本の指を出し「一回限り再びす可らず」(ヌール、アインマル、ウンド、ニヒト、イーヤ)と繰返して喚びたり。

(12)六月十二日(露暦五月三十日)晴。午後八時パコロブスカヤに着す。爰はシルカ、アルグン兩河の合流する處にして、下流を黑龍江と稱す。

パコロブスカヤには人家あり。住民多く寺院あり、荷物庫あり、船客に食物を賣る爲めに來る村女あり。爰に牛乳、鷄卵パンを買ひ始めて飢を療するを得たり。然るに坐する所の鐵床痛みを感ぜしむる甚だしく眠に就くこと能はざるを以て爰に評議一決し、秣用の枯草を買ひ需めて之を船底に置き、其上にケットを敷くことゝせり。是に於て前夜と大に苦樂を異にし、互に「靜に御休み」(スポコイノイ、ノッチ)と挨拶して寢に就きしが、夜中俄かに異臭に驚き、覺むれば枯草火を取りて燃え出し、すんでの事に船火事を出さんとするところであつた。

汽船は總て薪を燃料に用ふるが故に、其煙突より出づる火粉は、夜間之を望めば花火の如く美觀なれども、甲板にある荷物を燒損するは常の事なり。又舟の兩側には覆なく上部にナマコ板の平家根あり。夜中時々水の滴ることあるは河水のしぶきならんと思ひきや、深夜人定りて閑寂たる時、乘客此家根の上より放尿するものゝ風に吹かれてしぶき入るなりき。午後九時パコロブスカヤを發す。此日の温度は前日に異ならず。(略)

(13)六月十六日(露暦三日)晴。午前九時華氏六十四度、ストレテンスクに着す。

旅店はワクザール一軒なりしが、滿舍客滿ちて室の一隅だに餘さず。依つて他の新築中の旅店に投し、窓及屋根も未だ落成せざる室に入りしが、幸にして降雨なかりしため濕潤の患を免れた。

(14)六月十七日(露曆四日)晴。此日華氏五十度乃至七十度を上下す。近傍を巡見し、又汽車旅行の用意のために食物を買求む。聞くストレテンスク、イルクーツク間壹週三回旅客便乘の建築列車を發す。而して今夜九時は、其發車時刻なり。停車場は、ストレテンスクの人家ある所の對岸にして、其ところには人家なし。日暮を過ぐれば渡舟なし。故に午後四時に河を渡る。然るに定刻に至るも列車來らず。已むを得ずして乘降場に一夜を明したれども列車尙ほ來らず。之を驛員に問ふに、唯列車到着すれは久しからずして發車すと答ふるのみ。西伯利旅行は此時に限らず、總て前程を問ふに知るものなく只時機の來るを待つのみなり。

「ストレテンスク、イルクーツク間ザバイカル鐵道及湖上列車輸途船」より

(15)六月二十一日(露曆八日)晴。旭陽甚だ美、午前八時、列車は無事に湖畔ミソワヤに着せり。午前十時半列車輸送船に乘り、湖を渡るに五時間を費してバイカルに着したり。此列車輸送船は實に西伯利鐵道の偉觀にして、船は英國アームストロング會社製四千二百噸、機關車と車輛二十五臺を載するこを得。

貝加爾湖の水は實に清澄なり、月餘濁水のみを見るに慣れたる目には眞に壯快を覺ゆるの

みならず、十數日間面を洗ふの自由を得ざりしもの、此に至りて自由に清水を使用するを得て身心の爽快極まりなし。且周圍の連山秀麗にして、西伯利のアルプスと稱する亦宜なり。此日、ブーア人イルクーツクより來るに會し、始めて北清事件ありしをきく。(略)

「イルクーツク、チエリヤビンスク間中央及西部西伯利鐵道」より

(16)六月二十四日(露曆十一日)晴。午前中耕地を見たれども地味宜しからず、濶葉樹多し。午後に至り針葉樹木ある地を過ぎ、又好く耕されたる廣平地を見る。午後四時半イルクーツクを西に去ること、凡そ壹千露里の處に於て、エニセイ河橋を渡る。

エニセイ河の架橋は、西伯利鐵道中の最大なるものにして、毎徑間四百六十七呎のもの、六連及數個の板桁より成り、全長三千十七呎あり。明治三十二年の春に落成す。湖上輸送船と好一對の偉觀なりと雖も、歐米諸國には珍らしき程のものに非ず。

午後五時半イルクーツクより千〇九露里を西して、クラスノヤルスク市に著す。市はエニセイ河に面する高臺にありて、此地方物産の集散地たり。西伯利鐵道附屬の工場あり多數の機關車組立修繕をなす。

市の近傍に一の大牧場あり。數百千の牛馬は見渡す限り際限なき草野の間に散在せり。午後七時華氏八十九度、午後十一時半チエルノレチエンスカヤに着す。イルクーツクの西千百三十九露里の所にあり。此邊は針葉樹林あり。岡地多く平地少なし。鐵道線路は只泥土の築堤上に

枕木を置き軌條(レール)を敷きたるのみ。又虫類多きを以て、線路工夫は其面を黑色のレースにて覆ひ居れり。

(17)六月二十五日(露暦十二日)晴。午前は平原の良耕地にして、午後三時に至り、タイガに着す。爰より支線のトムスクに通するものあり。

午後は樺木の密林多く、六時半、ボロトノーエに着す。イルクーツクを西に去る事、凡そ千六百露里。時に山林燒け居りて、火烟の爲に滿天煙に覆はれ、日輪の形恰も金貨を見るが如し。風なき時は地上三四尺は、煙を以て覆はれ、樹木恰も水上に立つが如く列車も亦水中を走るが如き觀あり。又線路の側に樺木薪材數萬數を積み、其長さ一哩餘に及ぶを見る。此日溫度七十度乃至八十五度。

(18)六月二十六日(露暦十三日)晴。早朝煙の滿つること、前日の夕と異なるなし。午前九時半、華氏七十七度の時、烟漸く消滅す。

此地には牧場と小湖水とあり、又多くの耕地を見る。正午タタルスカヤに着す。爰はイルクーツクを西に去ること、二千百四十露里、即ち千三百二十餘哩。チエリヤビンスクの東九百四露里、即ち凡そ六百哩にあり。

是より先き列車中に車軸燒けて發火するものあり、屢々停車せしが、終に車軸の燒けたる車輛一臺を解放して、前後の車を連結し再び發車す。

此地方は、西部西伯利の平地にして、壹千哩間絶えて山を見ず。又豆大の砂利もなき泥土のみにして、十五呎の馬踏堤防上に三十呎軌條に、十一本乃至十三本の枕木を置き、上に四十九磅(ポンド)の軌條を敷設したるものにして、通過車輛は壹輛十噸以上の重量あり。故に列車車輛の通過する毎に軌條は波狀をなし、又築堤法に龜裂を生ずるを以て、速度を減じて通過するを常とす。此邊の軌條は千八百九十五年の露國製に係り其質は良好なり。其軌條細きがため、諸事不便を感ずるを以て、今や一「ヤード」に付六十四磅のものに改め敷替中に屬す。機關車燃料は薪と石炭とを混用す。午後七時天の一方に黑雲を認めしが、遽に大風雨となり列車進行する能はざるのみならず、僅に顚覆するを免かれたり。凡そ十五分間にして霽る。見來れば線路側の電信柱及樹木の倒れたるものあり。雨後急に冷氣となり、且つ日沒の景光美なるを見る。此近傍は大平原にて牧場多し。又多數の矮少なる小屋あり。小形の風車あり。韃靼人も多く居住すと聞く。

地味は宜しきものと考へられず。如何となれば築堤の爲に、土地を堀取りたる跡に雜草の生長すること遲く、又原野に馬車の通行せし轍痕の中央には、馬糞之が肥料となりて、草葉の色殊に鮮美なるを見るは、我が國の常とする所なるに、爰には之を認むること能はざるは、以て地味氣候の不充分なるを知るに足ればなり。(略)

(19)六月二十八日。午前四時チエリヤビンスクに着す。時に華氏六十六度。チエリヤビンスクは、

西伯利鐵道の西方極端驛にして、驛舍は石造稍見るべきの建物なり。イルクーツク、チエリヤビンスク間、凡そ三千五十露里(二千哩)の間を、六月二十二日午後二時に發し、二十八日午前四時に着し五晝夜と十四時間を費したれども、經度に關する時間の差三時間は、恰も回轉する地球に向つて走りし故に、之を加へて其距離を除するときは一時間の平均速度凡そ十五哩弱となり、停車時間を除けば、一時間凡そ十八哩の平均速度となる。

運輸方法は、線路と同じく未だ發達せず。或は列車の驛を行き過ぎて停車するあり。赤帽を戴く驛長追かけ來りて通行券を渡すあり。又は車掌が預りたる切符を失ひ、余輩に向つて、嘗て渡したる引替切符を只取せんとして、余輩に叱咤せられ已むを得ず番號の合せざる切符を渡すあり。運搬頗繁ならざるを以て列車の行違ふこと少なけれども、時に急行列車、郵便列車、貨物列車、又は追放人列車あり。其追放人を收容する車は窓外に鐵柵ありて、兵卒銃を肩にし、之を警戒す。車中には獰惡殆んど猛獸にひとしきものもあるべしと雖も、亦壓制政府に對して、反抗せし國事によりて罪を得たるもの、或は陰險者の爲に不幸の地位に陷れられたるものもあらん。又追放地に家族を伴ふを許されたるものありて、其妻子は車窓より余輩の西行するを目送しつゝありしが、蓋し故園を懷ふの心禁へ難きならん。有情の男子爲に數行の涙を洒がざるを得ず。

西部は平坦線なるが故に、貨物車五十餘臺を曳く列車を見たり。各驛にも、有蓋貨車數多ある

を見る。其輸送せし荷物も今一ヶ年七十萬噸に達して、尚ほ荷物の堆積せらるゝものありと聞く。且つ一ヶ年旅客百萬人移民二十萬人を輸送したりと云ふ。(略

石齊博士の風懷

彼の黑龍江を溯航するに當つて、汽船は淺瀨に座乘して、約四日間、有らゆる救助方法も效なく、船中の食物殆ど盡き將に饑餓に瀕せむとするに際し、從容自若、江岸を逍遙して、瑪瑙石を拾ひ、これに自家の雅號を刻するの風流韻事は、我が石齊博士にあらずんば誰かよく爲し得るものぞ。宜也、博士の手になりたる旅行日記の簡潔にして、餘韻に富み其の詞藻の精彩變々たること。編者は覺えず、行文の隨所に批圈し、神往の念なきを得ないのである。

博士の文藻

四、博士露國に滯留す

六月三十日莫斯克に着す

博士は以上の行程を重ね、愈六月二十八日を以つて、チエリヤビンスクを發し、急行列車に乘じて、六十三時間に二千四十五露里を馳せ、六月三十日夜、滯りなく莫斯克市に到着した。其の乘れる列車がツーラ驛より北すること百八十二露里、模糊たる彼方に、大都市のアウトラインの夢の如く浮び出づるを眺め、漸く近接するに及んで、三百九十六の寺院、一千有餘の金塔の斜陽の光に燦として輝くを觀ては、萬里

の客心果して奈何。博士は其の夜スラバンスキー、バサルに投宿したが、明けて七月一日は、博士をして今日あらしむるに最も力ありし故母堂の忌日に當るのであつた。博士は此の朝食堂に入るや卓上に備へありし一朶の花を取り、これを墓前に奠供すべく、家信のうちに封じて發送したのであつた。

萬里の客心亡き母を憶ふ

博士は莫斯克に駐ること二日間、次いで七月二日に彼得堡に赴き折柄御來遊中の、閑院宮載仁親王殿下に謁し、御下問のまゝ西伯利旅行の模樣を奉答した。而して博士は、同月九日を以つて露京を去つたのである。

閑院宮殿下に賜謁の後露都を去る

五、博士の調査と我が對露政策

六十年史中最も異彩ある事業

博士が六十年史中、學者として、將た國士として、最も異彩を放てる西伯利鐵道調査事業は斯くして行はれた。

博士は、今や如實に露人の極東政策の根幹をなせる西伯利鐵道の客となり、彼が偉大なる實際上の能力を剖檢した。而して、其の恐るべき政策の基準たる露國の首府に滯留して、親しく露國政府の帝國主義的思潮と、軍事的經濟的構成とを視察したのであるが、博士當年の感懷は、不知、何時如何の形を以つて、我が帝國の對露政策

博士當年の感懷如何

に現はれ、そも又、何の日に之を瞥見するを得やうぞ。博士は曩に黑龍江上、偶舟を同じうせし波蘭の一紳士より、强露の呑噬をうけたる亡國の悲哀を聽き其の言、切々としてなほ耳底を去らざるに、後六日、貝加爾湖を渡るの日、卽ち六月二十一日にして、博士は北淸事變の發生を聞知したではないか。

北淸事變を聞知す

北淸事變は、淸國に於ける排外運動の激發の結果に過ぎないのであるが、露國政府は機乘ずべしとて、出兵を斷行し、滿洲占領の伏線を布きたるの事實は、何人も之を看取するに苦しまざるところ。

日露間の危機一層急迫せるを感ず

日露兩國間の危機は、これによりて一層急迫を加へしは、博士が滯露當時の日記に見るも、明かに知り得るのである。

西伯利鐵道一九一及び一九二

博士歸朝後の西伯利鐵道調査報告

果然、博士は歸朝早々、此の年十月六日に、葉山に赴いて柱陸軍大臣(太郎)に、十六日には山縣總理大臣(有朋)に、十九日には參謀本部を訪ひ大山參謀總長(巖)外數名に、いづれも、西伯利鐵道の調査を語り、又前後三回實地踏査の報告書をものした。而して、其の翌三十四年末を以つて西伯利鐵道なる著述は上梓せられたのであるが、卷中編を分つこと五、附するに旅行日記を以てし、其の工事施行の方面に於いて、博士の專門學的研究は微に入り細を穿つて居るとはいへ、世に公けにせる此等の事柄の

著書「西伯利鐵道」上梓

みを以つて、博士が當年に於ける實地調査の全部と見るは如何であらうぞ。博士は其の日記の卷頭に西行法師の歌を題したのは日本に於いて或る野心を有するに非ざることを匂はさんためと思はれる。其の歌にいふ

卷頭に載せる西行の詠

よしのやまこぞのしをりの道かへて
まだみぬかたの花をたづねむ

(1)田邊博士著「西伯利鐵道」は明治三十五年二月十八日東京金港堂書籍株式會社より發行、一卷二百二頁、其の目次は下の如くである。即ち

第一編。一、西伯利の鐵道總說。二、西伯利の地理氣候物產。三、西伯利の人口人種。四、西伯利の沿革歷史○第二編。一、西伯利鐵道の起原。二、西伯利鐵道の確定。三、西伯利鐵道各線路表(實際に施工したるもの)○第三編一、烏拉爾山越線。二、西部西伯利線。三、中央西伯利線。四、義爾古德斯、貝加爾線、貝加爾廻岸線及列車輸送船。五、後貝加爾線。六、黑龍江線。七、烏蘇里線○第四編。一、東清鐵道發端。二、東清鐵道會社の組織。三、東清鐵道北部線。四、東清鐵道南部線○第五編。一、西伯利鐵道の工事方法。二、結論

六、東清鐵道副社長と會見す

博士は西伯利鐵道調査の事業成るや彼得堡を去るの前一日、東清鐵道會社に社長

彼得堡を去る前、東清鐵道會社副社長を訪ふ

ケルベッ氏を訪ひて訣別の辭を交換した。博士とケルベッ氏とは既に三年前より相識の間柄であつて、氏が明治三十年に來朝の際其の年の三月二十七日、東京鐵道局に於いて、博士は氏に面會し、一見舊知の如く、種々鐵道事業上の意見を交へたことがある。從つて當日の訪問に於いてケルベッ氏となせる談話は、博士の記錄によれば、大要左の如く懇懃を極めたものであつた。

ケルベッ氏と交換せる談話

東清鐵道副社長との談話

露曆千九百年六月二十六日、我が明治三十三年七月九日、露京を辭するに當り、東清鐵道會社副社長ケルベッ氏を訪ふ。(社長は名義丈けの清國人)

余語を亞ぎて云く、特に技師ベラエフ氏をして繁劇なる用務を繰合せ數日間工事各所案内の勞を取らしめられ、且つ參考に供すべき各種の書類を贈らる。貴下好意の深厚なる之を謝するに其辭は意を盡す能はず。又過刻は博物館を見るを得たり。其年代を追うて陳列せらるゝ所のものを見れば、能く國運の進歩を表證するに足る。思ふに彼得大帝、府を爰に開きしより、僅に二百年、其間文物の進歩甚だ速にして、國民は空論を口にせず、唯々上の命ずる所に從つて、能く之を服膺し、各其分を守り、進むあつて退くを知らざるは、實に欽慕に堪へざる所なり。今や貴下の擔任せらるゝ東清鐵道工事の如き、明治二十九年、組織に着手

せられて以來、其日尚ほ淺きに關はらず、壹千貳百哩に餘れる大鐵道も、今や其大半を了り本年露曆十一月の初めに至らば、浦鹽斯德より巴爾賓、奉天府を經て、旅順、大連灣に至るもの及巴爾賓より嚌々加爾(チチハル)に至るもの、合せて全線の四分の三に相當するもの開通せられんとす。豈驚く可きの進歩ならずや。嚌々加爾より後貝加爾支線に通じ、以て歐洲に貫通せんとする線路に於ては其間に大興安嶺の山脈あり、八千尺に餘れる長隧道及幾多の難工事ありて、其全線の竣功は尚ほ五年の後にありと雖も、長隧道の工事中は、茲に轉向線(スウツチ、バック)を設けて假に其連絡を計り、明治三十五年の末迄には列車を通過せしめんとの計畫なりと聞く。古人の夢にだも見ざりし歐亞大陸間に西伯利及滿州を通じ、氣笛の聲相聞こて列車の往復することを得るも、近く明後年間にあり。是れ誠に敬服の外なきなり。

ケルベッ氏云く　否々。貴下漫りに賞贊の辭を用ふるを止めよ。東清鐵道の工事、余が希望目的に達せざること甚だ多し。然れども退て考ふれば、敷設の場所は爰を隔つること壹萬露里の絶東にありて、工事に慣れざる支那人を使役し、技術者と工夫との間に言語の異なるがため、意義相通ぜざること數々にして、又時々馬賊の妨害を加ふるあり。因つて已むを得ず、全線に五千の兵を養ひ、之が備を爲さゞる可らず。加之、氣候は寒暑の兩極端に出會し、或は氷雪あるに困み、或は水なきを患へ、運搬の不便譬ふるに物なく、鐵類の如きは一部は之を歐露ヲデッサ港、又は他の歐洲港より、一部は之を北米合衆國より輸送するも、孰れも壹

萬餘哩の海上に係り其困難言語に盡し難し。貴下宜しく此等の事情に照らして少しく推恕せられたし。蓋し貴下の經驗は能く之を解するに足らん。彼の經驗なきものゝ如きは、漫に其進歩の遲きを責むるあり、如何ともする能はず。貴下又我が國の進歩を賞讃せらるれども、尚ほ獨逸國に及ばざる事甚だ遠し。英國の如きに至つては、俄かに企て及ぶべきに非ず。抑も我が國に於ては、少しく異例のものは悉く之を英佛獨た則らざる可らず。我が國の工業未だ幼稚の域を離れず。貴下は西伯利を通過して當地に來れり。正に我が國の全般を觀察せられしならん。余は三年以前に貴國に遊び留る事月餘なりき。其滯留長からずと雖も亦其一斑を窺ふを得たり。君見ずや、貴國には上に　叡聖の君あり、下に怜悧なる人民あり。三十年前は、貴國人自から機械を運轉すること能はず。外國船舶は國の周圍を航海して、旅人も此力により僅に急速なる旅行をなすを得たりし程なるに、今や日本、支那海のみに止まらず、日章旗を飜したる船舶は英國倫敦に定期の航海をなすに非ずや。鐵道の建築、運轉、電信の受送に至るまで、當初は外國人の力を假りしに、今や學術實驗に富みたるもの多々あるに非ずや。貴下が琵琶湖疏水工事に水力電氣を應用したるは、世界に魁たる事業の一として余の常に敬服する所なり。今や貴國の鐵道は延長して三千餘哩に達し、紡績も亦百萬錘（ワム）に至らんとす。殊に貿易は年を逐うて盛大に赴き、兵力亦世界の大國に劣らず。誰れか其進歩に驚かざらん。若し余をして思ふ所を包まず言はしめなば、殆んど嫉ましき情に

堪へざるなり。

余　讃賞の辭は、深く之を貴下に謝すと雖も、尚ほ好意あらば貴下の見聞する所に於て、我が國人の缺點たる所、希くは之を聞くことを得ば、是れ貴下の好意として余か最も悅ぶ所のものなり。

ケルベッ氏　暫くあつて徐かに口を開きて云く。貴下の意余之を了するを得たり。貴下は貴國民の進歩に滿足せず、尚ほ一層大に進まんと欲するものなり。世界は一定不動にあらず、進まざれば則ち退く、希くは俱に共に進まん。余をして余の感ずる所を憚からず言はしむれば、一言以て之を蔽はん。云く『貴國民は信用少なきこと上下一般なり』貴下は既に其意を解したるならんも、且つ余をして語を繼がしめよ。抑〻證書は其口にしたる言語を紙面に顯はしたるに過ぎず。貴國民は言語の信用に於て缺けたる處なきか、一諾必ず損失を厭はず口約必ず之を違へざるか、商品は見本に相違せざるか、上等品を見本として實際取引を爲すに粗品を混ずることなきか、期限を誤ることなきか、是等の諸點に於ては世界の人は支那人を信用すること、遙に貴國人の上にあり。職工の如きも貴國民を使役するときは、監督必要にして須臾も目を離すこと能はず。例へば舟を修繕するにも、支那の職工を沿海にて乘込ましめ、貴國の船渠に入り、是等の職工をして其工事に從事せしむれば、監督容易なりと云ふに非ずや。是等の面目を改むるに非ざれば、貴國の進歩將來それ如何。おのれ一個の

利益を得るに忙しく、取引上に於て不信用なることを敢てするものは、恰も國民の信用を食ひ盡すの賊たるに外ならず。もとより風俗人情の異なる、知らず識らず意外なることより、信用を缺く事なきに非ざるは、我が國と西部歐洲諸國との間にありても、屢々余の實驗する所なり。若し貴國の宗教、之を防禦する能はざれば、法律を作つて之を防禦せられよ。君見ずや、獨逸製（メード、イン、セルマニー）なる語は、昔日獨逸人が劣等品を製作したるにより、一の賤む可き語なりしに非ずや。今日に至つても、尙ほ其傾きなきに非ずと雖も、大西洋に今日航海する最大汽船の一なる維廉大帝（カイゼルウイルヘルム、デル、グロッセ）號は、空前の速度を以て英米兩國間を航海し、英國サウサンプトンに着港するや、其曾て賤められたる獨逸製なる語を以て、此船に公告し以て自慢とするに至れり。これ獨逸の商工業者が一致共同して、自國の信用增加に心を用ひ、獨逸製なる語を以て信用ある語に轉じつゝあるに非ずや。貴國々民、希くは努力、獨逸の轍を踏み日本製（メード、イン、ジャパン）なる語をして、世界に於て信用ある取引に用ひらるゝ迄、進められんことを希望に堪へず。思ふに貴國人民の怜悧なる、此點に着眼する遠きに非ざる可しと雖も、速に一致共同して自國の信用增加に力を盡すに非ざれば、其今日迄に進みたる速度の、未來に繼續するや否、大に疑なき能はず。いま貴下の意に任じ、乃ち余の所感を述べたり。知らず。貴下の意に適ふや否。

博士は卽ち七月十日、彼得堡を去る頃は日常の用務は露語を使用して差支なきま

巴里萬國博を觀覽後渡英す

でになつた、露語通譯の同伴者とも別れて獨逸に赴いた。次いで歐羅巴各地を視察し、佛國巴里なる萬國博覽會を觀覽して後博士は英國に渡つたのであつた。